



Title	ルクセンブルク語における多機能動詞 : lux. ginn (dt. geben)
Author(s)	西出, 佳代
Citation	独語独文学研究年報 = Nenpo. Jahresbericht des Germanistischen Seminars der Hokkaido Universität, 44: 194-213
Issue Date	2018-03
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/70519
Type	bulletin (article)
File Information	44_11_nishide.pdf



[Instructions for use](#)

ルクセンブルク語における多機能動詞 lux. *ginn* (dt. *geben*)¹

西出 佳代

1. はじめに

南から北へと向かうドイツ語方言連続の中で、その両極にあるバイエルン方言やスイスドイツ語、そして低地ドイツ語の研究が比較的注目を浴びる一方、中部ドイツ語の記述や分析は十分には行われていない。本稿では、西中部ドイツ語の中の特にモーゼルフランケン方言及びラインフランケン方言の一部において観察される授与動詞の用法に着目し、その言語類型的な特殊性を指摘する。具体的には、ドイツ語方言地理学で西モーゼルフランケン方言に分類されるルクセンブルク語の lux. *ginn* (dt. *geben*) を取り上げて、その屈折体系と用法を整理する。その記述を踏まえて、さらにどのような通時的な変化を経て多様な機能を得るに至ったのか、また現在のルクセンブルク語において lux. *ginn* の文法化がどの程度進んでいるのか観察し、考察を加える。

lux. *ginn* は、「与える」という本来の授与の意味を有する他に (1a)、「催す」、「放出する」などの意味を有する場合がある (1b)。また、非人称主語 lux. *et* (dt. *es*) とともに存在構文の中でも用いられる (1c)。これらの用法は標準ドイツ語の dt. *geben* と共通しているが、lux. *ginn* はその他に、起動相のコピュラとしての用法 (1d) や受動の助動詞としての用法を有している (1e)。統語的には、(1a) が3項、(1b, c, d) は2項動詞として用いられており、(1e) では動詞句を補語として伴っている。

(1) a. lux. Kannst du mir de Löffel *ginn*? (授与動詞)

*kannst du mir den Löffel geben*²

b. lux. Den Direkter *gëtt* all Joer e Banquet. (発生动詞)

der Direktor gibt jedes Jahr ein Bankett

c. lux. Et *gëtt* ëmmer méi Kanner, déi ze déck sinn. (存在動詞)

es gibt immer mehr Kinder die zu dick sind

d. lux. Vill klenge Jonge wëlle Pompjee *ginn*. (起動相のコピュラ)

viele kleine Jungen wollen Feuerwehrmann werden

e. lux. Dat aalt Haus *gëtt* ofgerass. (受動の助動詞)

das alte Haus wird abgerissen

LOD 掲載の例文より。一部変更。

¹ 本研究は、JSPS 科研費 15K16728 の助成を受けたものです。

² 本稿では、例文の下に斜体字で標準ドイツ語の逐語訳を付す。それだけでは解釈しにくいと考えられる場合には、横に丸括弧で標準ドイツ語の意識を付すこととする。

以上が lux. *ginn* の基本的な用法である。(1) の例から、ルクセンブルク語における lux. *ginn* は、部分的に標準ドイツ語の dt. *werden* に相当する意味や機能も有していることがわかる (1d, e)。標準ドイツ語の dt. *werden* には、さらに接続法過去形 dt. *würde* を用いた迂言的接続法表現の用法がある。ルクセンブルク語の lux. *ginn* の接続法過去形 lux. *géif* (dt. *gäbe*) にもこれに相当する機能がある (2a)。さらに、この迂言的接続法と副詞 lux. *gär* (dt. *gern*) とを組み合わせる迂言的願望表現としての用法が定着している (2b)。

(2) a. lux. Ech *géif* dohinner *goen*. (迂言的接続法)

ich gäbe dahin gehen (Ich würde dahin gehen.)

b. lux. Ech *géif* dat *gär gesinn!* (迂言的願望表現)

ich gäbe das gern sehen (Ich möchte das sehen!) Braun et al. (2005: 25)

lux. *ginn* の代表的な記述研究に、Krummes (2004) がある。この文献は、比較的豊富な例文を示しながら lux. *ginn* の特徴を整理している点において評価できる。しかし、文法化の過程についての考察は十分に行っておらず、説得力が弱い。文法化の過程については、Gaeta (2005) や Nübling (2006)、Lenz (2007) などが、他のゲルマン語と対照しながら詳細な分析を試みている。

本稿は、まず第2節で lux. *ginn* の屈折体系とその特徴を確認し、第3節でその用法を整理する。第2節、第3節の記述をもとに、第4節では lux. *ginn* の文法化のプロセスに着目する。第2節で記述した屈折体系をもとに、lux. *goen* との形式的類似性に起因する文法化を指摘する Krummes (2004) の論拠が薄弱であることを指摘し、発生動詞としての lux. *ginn* の用法を経由した起動相のコピュラの機能獲得を主張する Gaeta (2005) の分析が妥当であることを示す。その上で、受動の助動詞としての機能を獲得するに至る文法化を軸に、lux. *ginn* の全体的な文法化のプロセスを整理する。第5節では議論をまとめる。

2. lux. *ginn* の屈折体系

lux. *ginn* (dt. *geben*; ahd. *geban*)は、本来第V階梯の強変化動詞で、2,3人称単数直説法現在においてウムラウト (Umlaut, 変母音) を、直説法及び接続法過去でアプラウト (Ablaut, 母音交替) を示す。

ルクセンブルク語における前舌狭母音 *i は、通時的に低舌化や中舌化を起こしており (西出 2015: 170-175)、2,3人称直説法現在でウムラウトを起こした音として推定さ

れる語幹の母音 *i は、現在のルクセンブルク語では中舌化した母音 [ɛ̃]³ として観察される (lux. *gëss* [gɛ̃s], lux. *gëtt* [gɛ̃t])。一方、1 人称単数及び全人称の複数の直説法現在と不定詞においては縮約 (Kontraktion) が起きており、それに伴って高舌化したと考えられる母音 [i] が観察される (lux. *ginn*, lux. *gitt*)。2, 3 人称単数直説法現在において起こるウムラウトは、具体的には *i を含む語尾からの (部分的) 逆行同化、すなわち前舌化や高舌化である。これに対して、lux. *ginn* の屈折では中舌化や低舌化という一見逆方向の変化を起こしているように見える。しかしながら、これは上で挙げたいくつかの通時的音韻変化の結果だと考えられる。

表 1. lux. *ginn* (dt. *geben*) の屈折体系

	直説法現在		直説法過去		接続法過去		過去分詞
	単数	複数	単数	複数	単数	複数	
1 人称	<i>ginn</i>	<i>ginn</i>	<i>gouf</i>	<i>goufen</i>	<i>géif</i>	<i>géifen</i>	<i>ginn</i>
2 人称	<i>gëss</i>	<i>gitt</i>	<i>goufs</i>	<i>gouft</i>	<i>géifs</i>	<i>géift</i>	
3 人称	<i>gëtt</i>	<i>ginn</i>	<i>gouf</i>	<i>goufen</i>	<i>géif</i>	<i>géifen</i>	

直説法及び接続法過去において観察される語幹の母音 lux. *-ou-* と lux. *-éi-* は、それぞれ当該の法及び時制の「統一語幹母音」だと考えられる。「統一語幹母音」とは筆者による用語で、過去形の消失 (Präteritumschwund) の傾向が進むルクセンブルク語において、直説法及び接続法過去形を残す動詞の語幹で統一的に観察される母音を指す⁴ (西出 2017: 21ff.)。「統一語幹母音」は、どの階梯かによらず全ての強変化動詞において (lux. *blouf* – *bléif* (第 I 階梯 dt. *blieb* – *bliebe*), lux. *koum* – *kéim* (第 IV 階梯 dt. *kam* – *käme*) など)、またいくつかの語根動詞や弱変化動詞、過去現在動詞においても観察される (lux. *doung* – *déit* (語根動詞 dt. *tat* – *täte*), lux. *mouch* – *méich* (弱変化動詞 dt. *machte* – *machte* (*würde machen*)), lux. *woust* – *wéisst* (過去現在動詞 dt. *wusste* – *wüsste*)) (西出 2017: 22ff.)。接続法現在の形式は、ルクセンブルク語の全ての動詞の屈折体系からすでに失われており⁵、lux. *ginn* の屈折体系からも失われている。

³ 前半狭母音 [e] に中舌化の補助記号 [̃] を付した発音記号である。ルクセンブルク語における当該音はほぼあいまい母音の調音位置と同じ分布を示すが、本稿では強勢を伴わないあいまい母音 [ə] と区別するために強勢を伴う中舌音を [ɛ̃] として記述する (西出 2015: 60ff.)。

⁴ ただし、lux. *soen* – *sot* (dt. *sagen* – *sagte*), lux. *kënnen* – *konnt* (dt. *können* – *konnte*); lux. *brauchen* – *bräicht* (dt. *brauchen* – *bräuchte*) などの例外もある。

⁵ 接続法現在の形式は、慣用句などの限られた定型表現にのみ残っている：

(i) a. lux. Et *sief* dann! (dt. *Es sei denn!*)

b. lux. Gott *stéi* mir *bäi*! (dt. *Gott stehe mir bei!*) (Schanen/Zimmer 2012: 41-42)

最後に lux. *ginn* の過去分詞は、不定詞の形式と同じ lux. *ginn* (dt. *gegeben*) である。標準ドイツ語と同様、ルクセンブルク語においても原則として過去分詞には接頭辞 lux. *ge-* が付されるが、閉鎖音に先行する音韻環境や完了の語彙アスペクト (Aktionsart) の動詞の場合に lux. *ge-* が付加されない傾向がある⁶ (lux. *bliwwen* (dt. *geblieben*) (閉鎖音 [b] の前), lux. *fonnt* (dt. *gefunden*) (完了の語彙アスペクト) など) (Gilles 2011: 53-54)。lux. *ginn* も語幹が閉鎖音で始まる動詞であるため接頭辞が付されず、さらに語幹の母音も不定詞と同じであるため、結果として不定詞と過去分詞は全く同じ形式となっている。ルクセンブルク語における現在分詞はすでに動詞の屈折体系から失われている (Bruch 1973: 78)。

3. lux. *ginn* の意味と用法

lux. *ginn* には、本動詞としての用法と助動詞としての用法がそれぞれ複数個ずつある。第3節では、主に Krummes (2004) の記述をもとにしながら、lux. *ginn* 用法を本動詞と助動詞に分けて確認する。

3.1 本動詞としての lux. *ginn*

本動詞としての lux. *ginn* の用法には、(A) 「与える」という意味の本来の授与動詞としての用法の他に、(B) 存在を表す非人称構文における用法と (C) 起動相のコピュラとしての用法がある。

(A) 授与動詞

本動詞としてのもっとも基本的な用法は授与動詞としての用法である。

(3) a. lux. Ech *ginn* dem Bouf e Kichelchen.

ich gebe dem Jungen einen Keks

b. lux. Den Direkter *gëtt* all Joer e Banquet.

der Direktor gibt jedes Jahr ein Bankett

c. lux. *Ech *gouf* dem Bouf e Kichelchen.

ich gab dem Jungen einen Keks

d. lux. Ech *hunn* dem Bouf e Kichelche *ginn*.

ich habe dem Jungen einen Keks gegeben

e. lux. Ech *hat* dem Bouf e Kichelche *ginn*.

ich hatte dem Jungen einen Keks gegeben

(Krummes 2004: 12-13)

⁶ lux. *gegraff* (dt. *gegriffen*) などの例外もある。

授与動詞としての用法では、原則として3つの項、すなわち主格、対格及び与格の名詞句を必要とするが (3a)、「催す」、「放出する」などを意味する際には、標準ドイツ語と同様、主格と対格のみの2項動詞として使用される (3b)。

第2節の表1では、lux. *ginn* の直説法及び接続法過去の形式を挙げているが、過去形の衰退 (Präteritumschwund) の傾向が進むルクセンブルク語において (西出 2016)、授与動詞としての lux. *ginn* の過去形が用いられることはない (3c)。過去時制を表現する際には、常に迂言的な完了表現が用いられる (3d)。ルクセンブルク語における完了の助動詞には、標準ドイツ語と同様 lux. *hunn* (dt. *haben*) と lux. *sinn* (dt. *sein*) の2種類があるが、授与動詞としての lux. *ginn* は、助動詞として lux. *hunn* を選択し、過去分詞 lux. *ginn* (dt. *gegeben*) と共に完了表現を形成する (3d)。過去完了や大過去は、完了の助動詞の過去形 lux. *hat* (dt. *hatte*) を用いて表現される (3e)。

(B) 存在の非人称構文

標準ドイツ語には、存在を表す表現として非人称代名詞 dt. *es* を用いた dt. *es gibt* 構文がある。ルクセンブルク語にもこれに相当する lux. *et gëtt* 構文がある (4a)。この用法では、(A) 授与動詞の場合と異なり、過去時制を表す際に過去形 lux. *gouf* を用いることができる (4b)。

(4) a. lux. *Et gëtt eng Universitët zu Bangor.*

es gibt eine Universität in Bangor

b. lux. *Zu Bangor gouf et eng Universitët.*

in Bangor gab es eine Universität

(Krummes 2004: 15-16)

lux. *et gëtt* 構文は、一見、標準ドイツ語の dt. *es gibt* 構文と同様の構文だが、数の一致及び完了の助動詞の選択という2点において、異なる振る舞いを見せる。

まず、数の一致について Krummes (2004) で挙げられている例文を示す (5a, b)。

(5) a. lux. *Zu Bangor gëtt_{SG} et eng Universitëit_{SG}.*

in Bangor gibt es eine Universität

b. lux. *A Wales ginn_{PL} et vill Universitëiten_{PL}.*

in Wales geben es viele Universitäten

(Krummes 2004: 16)

Krummes (2004) の記述では、数の一致が義務的なかどうかについて言及されていない。筆者が母語話者数名に確認したところ、意味上の主語 lux. *vill Universitëiten_{PL}* と

定動詞 *lux. gëtt_{SG}* の数が一致しない文も文法的に問題ないとの回答が得られた (6)。少なくとも現在のルクセンブルク語における同構文の数の一致は任意だと考えられる。

(6) *lux. A Wales gëtt_{SG} et vill Universitëiten_{PL}.*

in Wales gibt es viele Universitäten

Krummes (2004) は、*lux. et gëtt* 構文においてなぜ任意に数の一致が起きるのか、その要因についても触れていない。考えうる一つの要因として本稿で指摘するのは、ルクセンブルク語において通時的に起きた主格と対格の間の格の融合である。標準ドイツ語においても、主格と対格が異なる形式になるのは男性単数の場合のみだが、ルクセンブルク語においては男性単数においても主格と対格が同形式であり（対格の形式に由来）、結果として全ての文法性及び数の主格・対格の形式上の区別が失われている。以下で、例として定冠詞、不定冠詞及び人称代名詞の男性単数主格・対格の形式を示す。

表 2. ルクセンブルク語における定冠詞、不定冠詞、人称代名詞の男性単数主格・対格

	定冠詞	不定冠詞	人称代名詞
主格	de(n) ⁷	e(n)	hie(n)/e(n) ⁸
対格	de(n)	e(n)	hie(n)/e(n)

標準ドイツ語の *dt. es gibt* 構文において、意味上の主語は対格の形式で現れるため、定動詞の *dt. geben* は主格の形式で導入される非人称主語 *dt. es* と義務的に一致すると考えられる。一方、ルクセンブルク語では主格と対格の形式的な区別が失われているため、意味上の主語の格があいまいになっていると考えられる。意味上の主語が主格として解釈された場合に、数の一致が起きると考えられる。

次に、完了表現における助動詞選択に関する特徴を挙げる。標準ドイツ語における *dt. es gibt* 構文では *dt. haben* を完了の助動詞として選択するのに対し、ルクセンブルク語における *lux. et gëtt* 構文においては、原則として *lux. sinn* が助動詞として選択される (7a)。*lux. hunn* を助動詞として用いることもある、あるいはそのような表現を耳にすることがあると答えた母語話者もいるが (7b)、それが標準ドイツ語の影響を受けた表現であり、ルクセンブルク語本来の自然な表現は助動詞 *lux. sinn* を用いた (7a) の文だというコメントも付け加えている。

⁷ ルクセンブルク語において、語末及び形態素末の /n/ は、母音もしくは特定の子音 ([t], [d], [ts], [n], [h]) の前以外の音韻環境において脱落する（「n 規則」）（西出 2015: 113ff.）。

⁸ [h] を伴う形式 *lux. hie(n)* [hiən] は、強勢を伴いうる基本形である。[h] を伴わない形式 *lux. e(n)* [ən] は、強勢を伴わない弱形である。

(7) a. lux. Zu Bangor *ass* et eng Universit  t *ginn*.

in Bangor ist es eine Universit  t gegeben (Krummes 2004: 16)

b. lux. ?Zu Bangor *huet* et eng Universit  t *ginn*.

in Bangor hat es eine Universit  t gegeben

以上の数の一致や完了の助動詞の選択の特徴から、ルクセンブルク語の lux. *et g  tt* 構文における lux. *ginn* の存在のコピュラ動詞化が、標準ドイツ語などと比べて進む傾向にあることをうかがうことができる。さらに、筆者が母語話者に確認すると、過去時制における数の一致について、過去形 lux. *gouf* を用いた文においては現在形と同様数の一致は任意に起こるが (8a)、完了表現においては数の一致を起こさない文の容認度が下がる傾向があることが明らかとなった (8b)。これは、完了の助動詞 lux. *sinn* とともに用いられることによって、解釈の曖昧性がある程度解消され、他動詞としてではなく存在のコピュラ動詞としての lux. *ginn* の解釈が優勢になるためだと考えられる。

(8) a. lux. Et *gouf/goufen* deemools vill Bicher a mengem B  ro.

es gab/gaben damals viele B  cher in meinem B  ro

b. lux. Et ?*ass/sinn* deemools vill Bicher a mengem B  ro *ginn*.⁹

es ist/sind damals viele B  cher in meinem B  ro gegeben

ただし、lux. *et g  tt* 構文における lux. *ginn* の存在のコピュラ動詞化はまだ完了するには至っていないと考えられる。本来の存在のコピュラ動詞 lux. *sinn* を用いた構文と比較すると、代名詞 lux. *et* の振る舞いが異なることがわかる (9)。

(9) a. lux. Et *g  tt* eng Universit  t zu Bangor.

es gibt eine Universit  t in Bangor

b. lux. Et *ass* eng Universit  t zu Bangor.

es ist eine Universit  t in Bangor

c. lux. Zu Bangor *g  tt* et eng Universit  t.

in Bangor gibt es eine Universit  t

⁹ Krummes (2004)では、過去形 lux. *gouf* を用いた文も完了表現を用いた文も、意味に違いはないと記述されているが、母語話者に対する調査では、(8b) の文よりも以下の文の方がより自然だとの回答が得られた。アスペクトの対立がまだ残っている可能性がある。

(ii) a. lux. Et *waren deemools* vill Bicher a mengem B  ro.

es waren damals viele B  cher in meinem B  ro

b. lux. Et *si bis g  schter* vill Bicher a mengem B  ro *ginn*.

es sind bis gestern viele B  cher in meinem B  ro gegeben

d. lux. Zu Bangor ass ___ eng Universit it.

in Bangor ist eine Universit t (Krummes 2004: 15)

lux. *sinn* を用いた構文における lux. *et* は、前域以外では脱落する (9d)。ルクセンブルク語においても主節の平叙文では原則として定動詞が第 2 位に置かれるため、同構文における lux. *et* はいわゆる「前域の *et*」もしくは「埋め草の *et*」であり、lux. *sinn* の項ではないと考えられる。これに対して lux. *et g tt* 構文では代名詞 lux. *et* を省略することができない (9c)。lux. *ginn* は、項としての非人称代名詞 lux. *et* を必要とする動詞だと考えられる。lux. *ginn* の存在のコピュラ動詞化が、今後どのようにして進行していくのかについては、今後も観察を続ける必要がある。

(C) 起動相のコピュラ

次に、起動相のコピュラとしての用例は以下である。多くの文献において、標準ドイツ語における起動相のコピュラ dt. *werden* のルクセンブルク語における同根語は、lux. *w erden*¹⁰ だと考えられている (Krummes 2004: 13; Dammel 2006: 159ff.)。標準ドイツ語の dt. *werden* が多機能の動詞であるのに対し、lux. *w erden* は、現在のルクセンブルク語においては推量及び未来時制の助動詞としての用法しか有していない (Dammel 2006: 160; Schanen/Zimmer 2012: 22, 39)。dt. *werden* のその他の用法は、ルクセンブルク語においては lux. *ginn* が担っている。本動詞を扱う 3.1 では、起動相のコピュラ動詞としての用法を挙げる。

(10) a. lux. Wann ech grouss si, *ginn* ech Pilot.

wenn ich gro  bin gebe ich Pilot (*Wenn ich gro  bin, werde ich Pilot*)

b. lux. D’Pamela *gouf* Mamm.

das-Pamela gab Mutter (*Pamela wurde Mutter*)

c. lux. G schter ass d’Pamela Mamm *ginn*.

gestern ist das-Pamela Mutter geben (*Gestern ist Pamela Mutter geworden*)

(Krummes 2004: 14)

起動相のコピュラとしての用法においても、過去形 lux. *gouf* を用いることができる (10b)。また過去時制を表現する手段として完了表現を用いることもでき、その際には

¹⁰ 変種として lux. *w erten* という形式もあるが (Braun et al. 2005: 218; Welschbillig et al. 2008: 174, 348)、本稿では Krummes (2004) 及び Dammel (2006) に倣い、以下では lux. *w erden* という形式で統一して記述する。

完了の助動詞として *lux. sinn* を選択する (10c)。過去形を用いた文と完了表現を用いた文との間に、明確な意味の違いはない (Krummes 2004: 14)。

3.2 助動詞としての *lux. ginn*

3.1 で述べたように、*lux. ginn* は、*dt. werden* が担う機能のほとんどを担っている。直説法の形式では (D) 受動の助動詞としての用法があり、標準ドイツ語の *dt. würde* と同様、接続法過去 *lux. géif* を用いて (E) 迂言的な接続法を表現することもできる。*dt. möchte* の存在のために標準ドイツ語ではさほど一般化されるに至っていない用法として、上記の迂言的な接続法に副詞 *lux. gär* (*dt. gern*) を伴った (F) 迂言的願望表現がある。

(D) 受動の助動詞

本来授与の意味を持つ *lux. ginn* のもっとも興味深い用法が、動作受動の助動詞としての用法である (11b)¹¹。

(11) a. *lux. Ech iessen de Kichelchen.*

ich esse den Keks

b. *lux. De Kichelche gëtt vu mir giess.*

der Keks gibt von mir gegessen (der Keks wird von mir gegessen)

c. *lux. De Kichelchen ass giess.*

der Keks ist gegessen

d. *lux. De Kichelche gouf giess.*

der Keks gab gegessen (der Keks wurde gegessen)

e. *lux. De Kichelchen ass giess ginn.*

der Keks ist gegessen gegeben (der Keks ist gegessen worden)

f. *lux. Et gouf gedantzt.*

es gab getanzt (es wurde getanzt)

(Krummes 2004: 17-18)

一方、状態受動の助動詞は標準ドイツ語と同様 *lux. sinn* (*dt. sein*) である (11c)。動作受動の過去時制を表現する際には、助動詞 *lux. ginn* の過去形 *lux. gouf* を用いるか (11d)、迂言的な完了表現が用いられる (11e)。完了表現において用いられる完了の助動

¹¹ 受益者受動の助動詞は、*lux. kréien* (*dt. kriegen*) である：

(iii) *lux. Muer kréie mer d'Gehëlz fir eisen Daach geliwwert.*

morgen bekommen wir das Holz für unser Dach geliefert (LOD)

詞は、lux. *sinn* (dt. *sein*) である。また、標準ドイツ語の dt. *werden* と同様、lux. *ginn* は非人称受動の助動詞として用いることもできる (11f)。

(E) 迂言的な接続法の助動詞

迂言的な接続法の助動詞としての用例は以下である。この用法では lux. *ginn* は接続法過去の形式 lux. *géif* の形式で用いられ、本動詞を不定詞の形式でとる (12a)。第2節で言及したように、ルクセンブルク語では接続法現在の形式が動詞の屈折体系から失われている。標準ドイツ語において接続法現在が用いられる間接話法の文などでは、代わりに接続法過去が用いられる (12b)。標準ドイツ語においては、dt. *haben* や dt. *sein* など頻度が高く助動詞としても用いられる動詞は、通常迂言的な接続法を用いないが、Krummes (2004: 19) で挙げられている例文を見ると、ルクセンブルク語においては lux. *sinn* も迂言的な接続法を用いて表現される場合があるようである (12c)。これに対して、話法の助動詞は迂言的に表現されないようである (12d, e)。

(12) a. lux. Ech *géif* dir et *soen*, mee ech wëll net.

ich gäbe dir es sagen aber ich will nicht (ich würde es dir sagen, aber ich will nicht)

b. lux. Hie sot, hie *wier eleng*¹².

er sagte er wäre allein (er sagte, er sei allein)

c. lux. Hie sot, hie *géif eleng sinn*.

er sagte er gäbe allein sein (er sagte, er sei allein)

d. lux. Hatt sot, ech *dierft* net an d'Schoul *goen*.

sie sagte ich dürfte nicht in die-Schule gehen

e. lux. *Hatt sot, ech *géif* net an d'Schoul *duerfe goen*¹³.

sie sagte ich gäbe nicht in die-Schule dürfen gehen (Krummes 2004: 19)

迂言的な接続法の助動詞として用いられるのは lux. *géif* だけでなく、他に lux. *géing* (dt. *ginge*), lux. *déit* (dt. *täte*), lux. *méicht* (dt. *machte/würde machen*) がある。

(13) a. lux. Ech *géing* der et *soen*.

ich ginge dir es sagen (Ich würde es dir sagen.)

¹² Krummes (2004) では <aleng> として綴られているが、本稿では現行の正書法に倣い <eleng> として綴っている。以下同様。

¹³ ルクセンブルク語における不定詞をとる助動詞は、右枠においてその不定詞に先行しておかれる場合がある。ただし、不定詞が助動詞に先行する標準ドイツ語と同じ語順も、同様に観察される。どちらの語順が用いられるかは任意である。

b. lux. Ech *déit* der et *soen*.

ich täte dir es sagen (Ich würde es dir sagen.)

c. lux. Ech *méicht* der et *soen*.

ich machte_{KONJ.} dir es sagen (Ich würde es dir sagen.) (Krummes 2004: 19-20)

これらの中でもっとも使用頻度が高いのは lux. *géif* であり、次いで lux. *géing* の頻度が高い。lux. *déit* や lux. *méicht* については、地域的な変種だとする母語話者もいた。

接続法の過去時制は、完了の助動詞の接続法過去形 lux. *hätt/wier* (dt. *hätte/wäre*) と本動詞の過去分詞によって表現されるため、lux. *géif* を始めとする上記の迂言的接続法の助動詞は現在時制でのみ用いられる。

(F) 願望の助動詞

先行研究においてあまり扱われていない lux. *ginn* の用法に願望の助動詞としてのものがある。これは願望を表す副詞 lux. *gär* (dt. *gern*) を伴う迂言的接続法の形式で用いられる。以下で、Bruch (1973) で挙げられている文を示す。

(14) lux. Ech *géif gär* mat dengem Papp *schwätzen*.

ich gäbe gern mit deinem Vater sprechen (Ich möchte mit deinem Vater sprechen.)

Bruch (1973: 71)

上記の用法は、迂言的接続法からの派生表現だと考えられるが、この表現が願望の表現として定着した背景として、ルクセンブルク語に標準ドイツ語の dt. *mögen* に当たる助動詞がないことが挙げられる。dt. *mögen* は、好みを表す本動詞として、また推量の助動詞として、そして接続法過去の形式で願望の助動詞として用いられる。ルクセンブルク語においては、好みを表す際には迂言的表現 lux. *gär hunn* (dt. *gern haben*) が用いられ (15a)、推量を表す際には他の助動詞 lux. *kënnen* (dt. *können*) (15b) や lux. *wäerden* (dt. *werden*) (15c) などが用いられる。その際、蓋然性を表す副詞 (lux. *vläicht* (dt. *vielleicht*), lux. *wuel* (dt. *wohl*), lux. *sécher* (dt. *sicher*) など) を伴うこともある。

(15) a. lux. Ech *hunn* dech *gär*.

ich habe dich gern (Ich mag dich.)

b. lux. Hal e Stull *fräi*, de Papp *kann* nach *kommen*.

halte einen Stuhl frei der Vater kann noch kommen

c. lux. Däin Dram *wäert* sech *wuel* net *erfüllen*.

dein Traum wird sich wohl nicht erfüllen (LOD)

4. lux. *ginn* の文法化と多機能性

第3節で確認したように、lux. *ginn* は、本動詞としても助動詞としても多くの機能を有する動詞である。存在動詞のように標準ドイツ語においても観察される用法もあるが、ルクセンブルク語ではコンピュータ動詞への文法化がより進んでいると考えられる。また、本来「授与」を表していた動詞が受動の助動詞になる文法化は、通言語的に見ても特に稀な例である (Nübling 2006: 172)。第4節では、受動の助動詞への文法化に焦点を当て、どのようなプロセスを経てこの変化が起きたのか先行研究をもとに考察する。この文法化の過程を明らかにすることによって、lux. *ginn* が起こした文法化の全体像が明らかとなり、同動詞が多機能を得るに至った要因を明らかにすることができる。

多くの先行研究において一致しているのは、受動の助動詞に至る変化は、起動相のコンピュータ動詞化を経て起きたという見解である。Krummes (2004) は、本来コンピュータ動詞化を起こしたのは移動の動詞 lux. *goen* であり、これが後に形式の似た lux. *ginn* と混同され、後者がコンピュータ動詞として定着したという説を紹介している。

表 3. lux. *goen* (dt. *gehen*) の屈折体系

	直説法現在		直説法過去		接続法過去		過去分詞
	単数	複数	単数	複数	単数	複数	
1 人称	<i>ginn</i>	<i>ginn</i>	<i>goung</i>	<i>goungen</i>	<i>géing</i>	<i>géingen</i>	gaang
2 人称	<i>gees</i>	<i>gitt</i>	<i>goungs</i>	<i>goungt</i>	<i>géings</i>	<i>géingt</i>	
3 人称	<i>geet</i>	<i>ginn</i>	<i>goung</i>	<i>goungen</i>	<i>géing</i>	<i>géingen</i>	

表 1 の lux. *ginn* の屈折体系と比較すると、確かに lux. *goen* の 1 人称単数及び全人称の複数直説法現在の形式が lux. *ginn* と共通している。しかしながら、2, 3 人称直説法現在やその他の時制、法の形式は異なっている。形式が部分的に共通しているだけで混同が起こるという主張は、やや説得力に欠ける。実際、迂言的接続法表現の場合 (lux. *géif/géing* + *V_{INF}*) を除き lux. *goen* が授与動詞やその他の lux. *ginn* の機能で用いられることはなく、lux. *ginn* が移動動詞として用いられることもない。Krummes (2004) でも指摘されている通り、2, 3 人称単数直説法現在においても混同が起こることはない。形式の類似性が変化の要因の一端である可能性は排除できないが、少なくとも主な要因として挙げるには根拠が薄弱である。

(16) lux. Du **gees/gëss blann*.

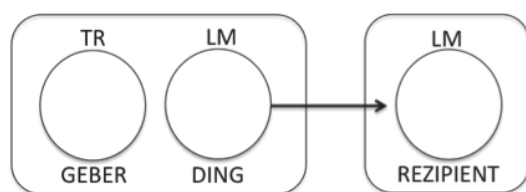
du gehst/gibst blind (Du wirst blind.) (Krummes 2004: 27)

起動相のコピュラ動詞化について、詳細に分析した研究に Gaeta (2005) がある。先に言及したように、lux. *ginn* の本動詞としての用法には「催す」、「放出する」などの2項動詞としてのものがある。Gaeta (2005) では、このような発生動詞としての用法を経由して、2つの変化、すなわち lux. *ginn* の存在動詞への変化 (lux. *et gëtt* 構文) と起動相のコピュラ動詞への変化が並行して起きたと主張している。

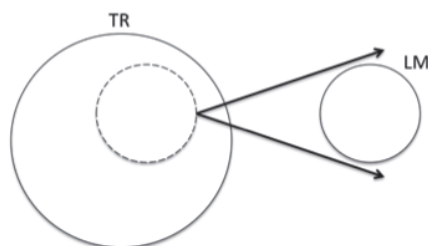
以下では、Gaeta (2005) において主張される3つの項をとる授与動詞から2つの項をとる発生動詞への変化のプロセスと (図1)、それに次いで起きた2つの並行する変化の過程 (表4) をまとめる。

図1. 授与動詞の文法化 (Gaeta 2005: 198ff.)

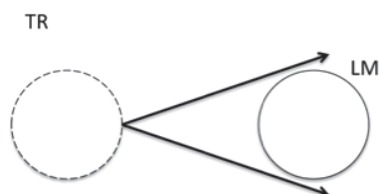
i. 授与動詞



ii. 事物の発生



iii. トラジェクターの背景化



TR: Trajektor (最も際立っている参与者)

LM: Landmark (他の参与者)

実線: プロファイルされているもの

破線: 背景化したもの

まず授与動詞として使用される際 (図1. i)、「授与者」(GEBER) は最も際立つ参与者、すなわちトラジェクター (Trajektor) としてプロファイルされる。授与者の制御領

域 (Kontrolldomäne) 内にある「事物」(DING) が一つ目のランドマーク (Landmark) であり、これが二つ目のランドマークである「受益者」(REZIPIENT) のもとへ移行する。これが本来の「授与」の意味のイメージ・スキーマである。

起動相のコピュラ動詞化へとつながる重要な変化は、「事物」のランドマークがトラジェクターの制御領域から出ること、すなわち主語の意図によらずなんらかの結果が生じる意味への転化である (図 1. ii)。こうした用法の例として Gaeta (2005) で挙げられているのが (17) である。

(17) dt. Der Baum gab viele Früchte. (Gaeta 2005: 200)

上記の変化によって、動作主性 (Agentivität) の背景化が起こり、受益者の参与が失われる。3 項から 2 項動詞への変化は、以上のように説明される。

図 1. ii 及び (17) では、まだ「事物」の発生源がプロファイルされているが、さらに変化が進むとトラジェクターの背景化が起こり、本来の授与動詞が有していた因果性¹⁴ が失われる (図 1. iii)。一方で、動作や出来事の完了が含意される終着性 (Telizität) は失われずに保たれるとされており、そこから起動相の意味へと再解釈が進んだと考えられている (Gaeta 2005: 200-201)。

2 項動詞になってから因果関係が失われ、それぞれ存在動詞と起動相のコピュラへと変化するプロセスについて、Gaeta (2005) 仮説をまとめたのが表 4 である。

動作主 X が背景化して生じた結果 Y に焦点があたる変化を起こしたものが非人称主語を用いる存在動詞構文であり、これに対して動作主 X が結果として新たな実体になる、あるいは新たな特徴を有する Y_X になるのが起動相のコピュラ動詞へと変化する過程だと考えられる。

標準ドイツ語においては起きたのは存在動詞への文法化のみだと考えられるが、その変化と起動相のコピュラ動詞化の平行性を指摘する Gaeta (2005) の仮説には説得力がある。ルクセンブルク語においては、並行する 2 つの変化、存在動詞化と起動相のコピュラ動詞化の両方が起きたと考えられるのである。

¹⁴ Gaeta (2005: 200) の本文中では、„Kausitivität“ とされているが、これは誤植だと考えられる。„Kausativität“ ならば「使役性」と訳せるが、ここでの文脈と合わない。表 4 で引用している部分に „eine kausale Beziehung“ 「因果関係」という表現があるため、本来の意図は „Kausalität“ だったと考え、上では「因果性」として訳している。

表 4. 存在動詞と起動相のコピュラへの文法化 (Gaeta 2005: 198ff.)

存在動詞	起動相のコピュラ
X gibt Y X と Y の成立の間に因果関係がある。 ↓	X gibt Y X と Y の成立の間に因果関係がある (X と Y は別個)。 ↓
Es gibt Y なんらかの先行事象・事物によって Y が成立する。 ↓	X gibt Y X と Y の成立の間に因果関係がある (Y は X の延長にある)。 ↓
Es gibt Y 不特定の先行する出来事によって、Y が成立する (生じる)。 ↓	X gibt Y _X X が有する特徴の発展によると考えられる、新たな実体・特徴 Y _X が生じる。 ↓
Es gibt Y Y が存在する。	X gibt Y _X X が Y _X になる。

次に、Nübling (2006) では、起動相のコピュラ動詞から受動の助動詞に至るまでの文法化の過程について詳細に分析されている。同文献によると、この変化は右辺の要素、すなわち変化後の結果を表す項の品詞が、本来の名詞 (18a) から形容詞 (18b)、過去分詞に由来する形容詞 (18c) を経て、通常の過去分詞 (18d) に一般化されることによって起きたと考えられている。

(18) a. lux. Ech *gi* Schoulmeeschter_{NP}.

ich gebe Lehrer (Ich werde Lehrer.)

b. lux. Ech *gi* krank_{ADJ}.

ich gebe krank (Ich werde krank.)

c. lux. Ech *gi* depriméiert_{ADJ(PP)}.

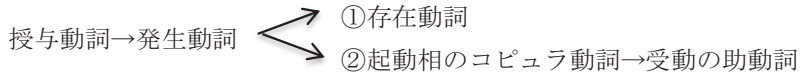
ich gebe deprimiert (Ich werde deprimiert.)

d. lux. Ech *gi* gefrot_{V(PP)}.

ich gebe gefragt (Ich werde gefragt.) (Nübling 2006: 189)

以上の議論をまとめると、第3節で記述した lux. *ginn* の用法のうち、(A) 授与動詞、(B) 存在動詞、(C) 起動相のコピュラ及び (D) 受動の助動詞に関する文法化は、2項の発生動詞を経た二股の変化に起因していると考えられる。

図 2. 受動の助動詞に至る lux. *ginn* の文法化



Lenz (2007: 171) では、さらに (E) 迂言的接続法の変化は起動相のコピュラ動詞からさらに枝分かれして、受動の助動詞への変化と平行して起きたと考えられている。本稿の第 3 節で挙げたもう一つの機能 (F) 迂言的願望表現は、(E) 迂言的接続法からの派生表現だと考えられる。したがって、lux. *ginn* の多機能性は標準ドイツ語では起こらなかった起動相のコピュラ動詞への変化 (図 2 ②) に端を発すると考えられる。

Lenz (2007: 172) には、アメリカのペンシルバニア・ドイツ語における授与動詞が起動相のコピュラ動詞まで文法化を進めているとの報告がある。Gimth (2000: 139) によると、ルクセンブルクの周囲のモーゼルフランケン方言地域やラインフランケン方言地域の西部で、起動相のコピュラ動詞としての用法に加えて、受動の助動詞としての授与動詞の用法が観察されるとのことである。しかしながら、迂言的接続法以降の変化を起こした言語変種は他になく、この点においてルクセンブルク語の授与動詞の文法化はゲルマン語の中でもっとも進んでいると考えることができる。また、第 3 節で記述した通り、標準ドイツ語において観察される存在動詞としての用法においても、意味上の主語と任意に数の一致を起こしたり、完了の助動詞として lux. *sinn* が選択されるなど、lux. *ginn* の文法化が全体的に高度に発達していることがわかる。

最後に、lux. *ginn* が未来の助動詞としての機能も発達させている可能性を指摘する。

(19) a. lux. Muer *gëtt* et Reen_{NP}.

morgen gibt es Regen (Morgen wird es regnen.)

b. lux. Muer *gëtt* et gutt_{ADJ}.

morgen gibt es schön (Morgen wird es schön.)

c. lux. Wat *gëtt* dat *ginn*_{V(INF)}?

was gibt das geben (Was wird das werden?) (母語話者による文)

(19a, b) は、ともに非人称代名詞 lux. *et* を用いた天候に関する例文であり、それぞれ前者は存在動詞、後者は起動相のコピュラ動詞を用いた文として解釈することもできる。いずれも動詞は直説法現在の形式であり、これが未来時制の副詞 lux. *muer* (dt. *morgen*) と共起していることがわかるが、ルクセンブルク語における未来時制は、標準ドイツ語と同様、原則として現在形で表現するため、これだけの例で lux. *ginn* 自体が未来の意味を担っていると主張することはできない。しかしながら、起動相のコピュラ動詞を不

定詞の形で本動詞としてとる (19c) のような例文において、直説法現在の形式 (lux. *gëtt*) で文に導入されている定動詞は未来の助動詞として機能している可能性がある。

現在のルクセンブルク語において、未来時制もしくは推量のモダリティを表す助動詞として用いられるのは lux. *wäerden* であり、(19c) のような lux. *ginn* の用法は非常に周辺的である。しかし、発生や起動相の意味を有する lux. *ginn* と未来時制との親和性は高く、lux. *ginn* が標準ドイツ語の dt. *werden* と同様に未来時制の助動詞としても文法化を進める可能性は指摘できる。

5. まとめ

本稿では、非常に多くの機能を有するルクセンブルク語の動詞 lux. *ginn* をとりあげ、その用法とそれらを得るに至った文法化の過程について、先行研究を参考にしながら考察を加えた。

第3節で確認した lux. *ginn* の用法をまとめたのが表5である。「基本的な形式」の欄について、(E) 迂言的接続法や (F) 迂言的願望表現の助動詞としての用法の lux. *ginn* は、接続法過去の形式以外で用いられることはない。それ以外の用法の「基本的な形式」は直説法としているが、接続法の形式で用いることもできる。

(20) lux. Dësen CD *géif* vum John *opgeholl ginn*.

dieser CD gäbe vom John aufgenommen geben. (Diese CD würde von John aufgenommen werden.)

(Schanen/Zimmer 2012: 72)

表 5. lux. *ginn* の用法のまとめ

用法	文中の機能	基本的な形式	完了の助動詞
(A) 授与動詞	本動詞	直説法 (lux. <i>ginn</i>)	lux. <i>hunn</i>
(B) 存在動詞 (lux. <i>et gëtt</i> 構文)			lux. <i>sinn</i>
(C) 起動相のコピュラ			
(D) 受動の助動詞	助動詞	接続法 (lux. <i>géif</i>)	——
(E) 迂言的接続法の助動詞			
(F) 迂言的願望表現の助動詞			

lux. *ginn* 文法化のプロセスの中で、言語類型的に興味深いのは受動の助動詞への文法化である。授与動詞から受動標識への文法化の例としてよく知られているのは、中国語

における受動標識「給」(gěi) である¹⁵。この要素は、共時的には動作主を導入する前置詞として記述されている (佐々木 2007: 993)。

(21) mand.¹⁶ 门 给 风 吹 开 了。

Tür PASS Wind blasen-öffnen ASP 「門が風に吹き開けられた。」 (佐々木 2007: 990)

多くの先行研究において、授与動詞の受動標識への文法化は中国東南地域の影響を受けたものだとされており、この地域では授与動詞が使役標識へと文法化を起し、次いで受動標識へと変化したと考えられている (Haspelmath 1990: 46ff.; 佐々木 2007)。

図 2. 中国語の授与動詞の受動標識への文法化

授与動詞 → 授与使役標識 → 許容使役標識 → 受動標識
(佐々木 2007: 1003)

一方、lux. *ginn* の文法化は起動相のコピュラ動詞化を経たものだと考えられる。

図 3. ルクセンブルク語授与動詞の受動標識への文法化

授与動詞 → 発生動詞 → 起動相のコピュラ動詞 → 受動の助動詞

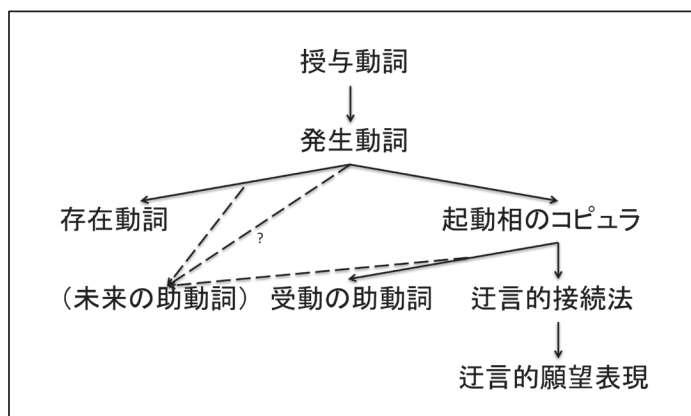
使役文を経由して発達した中国語の受動文では動作主 ((21) では「風」) の省略ができないのに対し (佐々木 2007: 997)、ルクセンブルク語における受動文は、他の多くのヨーロッパ言語における受動文と同様、動作主が背景化し、省略された文の方が頻度が高い。授与動詞が受動標識に文法化を起したという点において、中国語とルクセンブルク語の受動文は共通しているが、両者は通時的には全く異なるプロセスの文法化を起しており、その違いが受動文が義務的に有する項の数の違いとして共時的にも現れていると考えることができる。

本稿で扱った lux. *ginn* の文法化の過程を全てまとめたのが、図 4 である。

¹⁵ 「官話」と呼ばれる標準語には、他に 3 つの受動標識「被」、「让」、「叫」がある。

¹⁶ Mandarin. 中国語官話 (北京等の中国北部で話される方言。標準中国語)。

図 4. lux. *ginn* の文法化の過程



未来の助動詞についての先行研究はほとんどなく、文法化の経路ははっきりしない。発生動詞としての用法から直接発展したとも考えられるが、(19a, b) のような存在動詞や起動相のコピュラ動詞を用いた構文から影響を受けている可能性もある。また、未来の助動詞としての用法はまだ周縁的であり、未来時制は多くの場合、直説法現在や別の助動詞 *lux. wäerden* を用いて表現される。未来の助動詞としての *lux. ginn* の文法化の過程を探ること、また今後の動向を観察することが今後の課題の一つとして挙げられる。

lux. ginn は、標準ドイツ語における *dt. werden* の多くの機能を有しているが、未来の助動詞と推量の助動詞としての機能は主に *lux. wäerden* が担っている。なぜ他ならぬ *lux. ginn* がここまで多くの機能を得るに至ったのか、もしくはなぜ未来や推量の助動詞としての機能のみ *lux. wäerden* に機能を譲っているのか、さらに観察と分析を進めることが今後の課題と言える。

参考文献・URL

- Braun, Josy/Johanns-Schlechter, Marianne/Kauffmann-Frantz, Josée/Losch, Henri/
Magnette-Barthel, Geneviève (2005): *Les verbes luxembourgeois*. Luxembourg: Ministère de l'Éducation nationale et de la Formation professionnelle.
- Bruch, Robert (1973³): *Précis populaire de grammaire luxembourgeoise. Luxemburger Grammatik in volkstümlichem Abriss*. Luxembourg: Editions de la section de linguistique de l'Institut grand-ducal.
- Dammel, Antje (2006): „Präteritopräsentia im Luxemburgischen“ In: Moulin/Nübling (Hrsg.) (2006), 139-169.

- Gaeta, Livio (2005): „Hilfsverben und Grammatikalisierung: Die fatale Attraktion von *geben*.“ In: Leuschner, Torsten/Mortelmans, Tanja/de Groot, Sarah (Hrsg.): *Grammatikalisierung im Deutschen*. Berlin/New York: Walter de Gruyter, 193-209.
- Gilles, Peter (2011): „Morphologie des Partizips II im Luxemburgischen.“ In: Gilles, Peter/Wagner, Melanie (Hrsg.): *Linguistische und soziolinguistische Bausteine der Luxemburgistik*. Frankfurt am Main et al.: Peter Lang, 51-82.
- Girnth, Heiko (2000): *Untersuchungen zur Theorie der Grammatikalisierung am Beispiel des Westmitteldeutschen*. Tübingen: Max Niemeyer Verlag.
- Haspelmath, Martin (1990): “The Grammaticization of Passive Morphology.” In: *Studies in Language* 14, 25-72.
- Krummes, Cédric (2004): *The Letzebuergesch Verb ginn (give). Grammaticalization from full verb to copula, existential construction, passive auxiliary, and conditional mood auxiliary*. Dissertation (University of Wales).
- Lenz, Alexandra (2007): “The grammaticalization of *geben* ‘to give’ in German and Luxembourgish.” In: Elspaß, Stephan/Langer, Nils/Scharloth, Joachim/Vandenbussche, Wim (eds.) *Germanic Language Histories ‘from Below’ (1700-2000)*, Berlin/New York: Walter de Gruyter, 163-178.
- LOD = Lëtzebuerg Online Dictionnaire. <http://www.lod.lu/> (2017年9月30日最終閲覧).
- Moulin, Claudine/Nübling, Damaris (Hrsg.) (2006): *Perspektiven einer linguistischen Luxemburgistik*. Heidelberg: Universitätsverlag Winter.
- 西出佳代 (2015): 『ルクセンブルク語の音韻記述』北海道大学出版会.
- 西出佳代 (2016): 「ルクセンブルク語における過去形の衰退—音韻的・形態的観点からの一考察—」『国際文化学研究』(神戸大学大学院国際文化学研究科紀要) 第46号、29-55.
- 西出佳代 (2017): 「ルクセンブルク語の動詞屈折におけるウムラウトとアプラウト」(研究ノート) 『Sprachwissenschaft Kyoto』 第16号、13-33.
- Nübling, Damaris (2006): „Auf Umwegen zum Passivauxiliar – Die Grammatikalisierungspfade von GEBEN, WERDEN, KOMMEN und BLEIBEN im Luxemburgischen, Deutschen und Schwedischen.“ In: Moulin/Nübling (Hrsg.) (2006), 171-201.
- 佐々木勲人 (2007): 「東南方言における授与と受動」『南腔北調論集 中国文化の伝統と現代』東方書店.
- Schanen, François/Zimmer, Jacqui (2012): *Lëtzebuergesch Grammaire luxembourgeoise*. Esch-sur-Alzette: Editions Schortgen.
- Welschbillig, Myriam/Schanen, François/Lulling, Jérôme (2008): *Luxdico. Lëtzebuergesch > Deutsch, Deutsch > Lëtzebuergesch*. Esch-sur-Alzette: Editions Schortgen.